

COVID-19 ワクチン接種を考慮する妊婦さんならびに妊娠を希望する方へ（抜粋）

日本産婦人科感染症学会
日本産科婦人科学会
第2版 令和3年5月12日

現在、医療従事者や重症化リスクの高い高齢者が優先的に接種を受けていますが、今後希望するすべての国民に接種が始まります。

およそ半年という極めて短い時間にワクチン開発が行われたために、まだ長期間にわたる有効性や安全性に関する臨床データの集積はありません。ただし、大規模な接種を始めたイスラエルや英国では、新規感染者、重症者、死亡者のすべてで激減しています。副反応の一つであるアナフィラキシーを含むアレルギーの頻度は、米国におけるファイザー製ワクチン治験時には 0.0011%とされています。現在までの我が国の接種では、局所の疼痛・腫脹、頭痛、疲労、悪寒、筋肉痛、関節痛、下痢、発熱などの症状が1-2日続くとする報告はありますが、致命的な副反応は報告されていません。mRNA が接種を受けた方の遺伝子に組み込まれるとか、接種を受けた方が有害な物質を産生する、接種後に感染しやすいといった事実はありません。抗体が十分に誘導されるには、1-2週間必要です。

現時点では、妊婦の接種に対する接種について十分な知見がなく、見解が分かれています。世界的な流行拡大と妊婦の一部で重症化することから積極的に接種をすべきという考え方が大勢を占めており、米国でも妊婦への接種を推奨するとしています。また、COVID-19 mRNA ワクチンの生殖に関する研究はまだ完了していませんが、現時点で胎児や胎盤に毒性があるとかワクチン接種を受けた人が不妊になるといった報告はありません。しかしながら、中長期的な副反応については、今後も情報収集する必要があります。

- 1、COVID19 ワクチンは、現時点では、世界的に接種のメリットがリスクを上回ると考えられる。
- 2、流行拡大の現状を踏まえて、妊婦をワクチン接種対象から除外しない。特に人口当たりの感染者が多い地域では積極的な接種を考慮する。接種する場合には、産婦人科医は被接種者に、長期的な副反応は不明で、胎児および出生児への安全性は確立していないことを事前に十分に説明する。同意を得た上で接種し、その後 30 分は院内で経過観察する。現時点で mRNA ワクチンに催奇性や胎児胎盤障害を起こすという報告は無いが、器官形成期（妊娠 12 週まで）は、偶発的な胎児異常の発生との識別に関する混乱を招く恐れがあるため、ワクチン接種を避ける。妊婦には母児管理のできる産婦人科施設などでワクチンを接種することが望ましく、なるべく接種前後に超音波などで心拍を確認する。直前検査が難しい集団接種や、産科のない診療所などで接種する場合、接種前後 1 週間以内に妊婦健診を受診するように指示する。
- 3、妊婦ならびに妊娠を希望する方で、感染リスクが高い医療従事者、保健介護従事者、重症化リスクが高い肥満や糖尿病などの基礎疾患を合併している場合、ワクチン接種を積極的に考慮する。
- 4、妊婦のパートナーは、家庭内での感染を防ぐために、ワクチン接種を考慮する。
- 5、妊娠を希望される女性は、可能であれば妊娠する前に接種を受けるようにする（生ワクチンではないので、接種後の避妊は必要ない）。